

令和 7 年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 3 月 25 日

札幌市立 上野幌中学校

1 今年度の重点目標

1「学ぶ力」の育成 2「豊かな心」の育成 3「健やかな体」の育成 4 小中一貫した教育の充実 5 家庭や地域との連携 6 チーム担任制を含めた新体制の構築

2 本年度の経営方針

1「主体的に活動する生徒」の育成に向けた教育活動の推進 2「学ぶ力」の育成を図る授業改善と評価の工夫 3「豊かな心」の育成を図る道徳教育と生徒支援体制の充実 4自治的な活動の充実 5家庭や地域、小学校との「つながり」と「発信」を意識した信頼される学校づくり 6チーム担任制を軸とした組織の見直しと魅力的な職場づくり

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	未来を見据え、自ら考え、判断し、行動する生徒	自ら考え、動き、共に高め合いながら、未来に向かって挑戦する姿	B	生徒の主体性は着実に高まっているものの、失敗を恐れず一歩踏み出す「挑戦心」の育成が次なる課題となっている。今後は、試行錯誤や失敗を「学びのプロセス」として肯定的に捉え直す支援を強化し、生徒が安心して新たな一歩を踏み出せる心理的安全性の高い環境づくり、小さな挑戦を称賛する評価体系への改善を図る。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		「挑戦心」の育成には、学校内だけでなく、生徒が多くの時間を過ごす家庭や地域の理解が不可欠である。それぞれの家庭環境や地域の特性によって、失敗に対する価値観も異なるため、まずは学校が目指す「失敗を肯定する教育支援」をより積極的に発信し、共有する。その上で、周囲の大人が足並みを揃えて生徒の挑戦を後押しできるように、具体的な協力依頼を含めた働きかけを強化することで、心理的安全性の高い土壌を育む鍵となる。				
人間尊重の教育	子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくり	道徳教育、学校評価アンケート	A	人間尊重の精神を基盤に、道徳教育と相談活動を連動させ、生徒が互いの存在を認め合い自己肯定感を高める教育を推進する。具体的には対話や日常的な振り返りを通じ、個々のよさや可能性を価値付ける安心・安全な居場所を構築する。学習面では、教師主導の「育てる」授業から、生徒が自ら問い探究する「育つ」学びへと転換し、主体的に個性を発揮できる環境を確立する。これらの取組を通じ、自分を大切にしながら他者や社会と共生する。豊かな人間性を育む。	A	A
「学ぶ力」の育成	「学ぶ」育成プログラムの実施	ICTの活用についてのアンケート、学校評価アンケート	B	定期テスト廃止に伴い、単元ごとの評価で成長を実感させる仕組みが整った一方、学校評価アンケート(生徒)の「わかる・できる・楽しい」という実感に課題が残った。今後は基礎学力の確立やICT(AI)を活用し、毎時間の学習の自当てを明確化することで、生徒が主体的に見通しをもてる授業を展開する。具体的にはAARサイクルを軸に、誰一人取り残さない個別最適な支援と、探究的な学びを面立させ、「わかった!・できた!」という喜びを生徒に届けるべく、教員の指導力向上と授業の質改善を図る。	A	A
「豊かな心」の育成	道徳教育	特別の教科道徳科の評価、学校評価アンケート	A	道徳教育と日常的な相談活動の相乗効果により、生徒の間には互いに認め合う相互承認の土壌が育った。学校評価アンケート(生徒)でも、道徳の学びを自己の成長に繋げているとの肯定的な回答が全学年で多かった。今後は道徳で学んだことを自分たちの生き方に生かす大切さをさらに深めるとともに、各学年経営計画の指導方針を再徹底し、教育相談活動を充実させる。具体的には、定期アンケートを有効活用して不登校要因の早期対応やいじめの未然防止を強化する。生徒一人一人が教師を信頼し、学校を「安心できる居場所」と実感できるように、生徒の支援体制の充実を図る。	A	A
「健やかな体」の育成	「健やかな体」育成プログラムの実施	運動やスポーツに進んで取り組める学習環境づくりの推進、全国学力・学習状況調査(生徒質問紙)	A	体育科ではICTを活用した課題探究的な学習を日常化し、目標を明確にした授業構成で運動の楽しさを伝えた。また、保健だよりによる継続的な啓発は、生徒の規則正しい生活習慣の確立、給食だより(郷土料理、リザーブ給食等)を通じた食育の実践は、生徒の豊かな食習慣の形成につながった。今後は様々な場面で「自分の健康は自分で守る力」を伝える。家庭への発信を継続し、密に連携しながら、心身ともに逞しい生徒の育成に努める。	A	A

いじめ対策	未然防止・早期発見・迅速な対処	いじめアンケート、生活に関するアンケート、全国学力・学習状況調査(生徒質問紙)	B	「いじめ防止基本方針」に基づき、心の健康観察アプリやアンケートを多角的に活用し、早期発見と迅速な教育相談を行った。これらの情報は、いじめ対策会議や支援会議で定期的に共有し、保護者との連携を図りながら組織的に対応した。今後は、生徒へのきめ細やかなケアや声を上げられない生徒のサインを見落とさない支援体制の更なる強化(重層的見守り・居場所づくり、個別面談の充実、アンケートの工夫)を目指す。加えて、教職員の情報共有の質を高め、子ども理解に努め、生徒一人一人が安心して過ごせる学校づくりを目指す。	A	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	今あるものを「活かした」連携の具現化	小中一貫した教育の推進、教職員アンケート	A	小学校との情報共有や授業公開、生徒会交流を通じて、9年間を見通した目指す姿の共通認識が深まった。特に、総合的な学習の時間における探究サイクルやキャリアパスポートの共有など、一貫性のある指導が定着しつつある。交流会を重ねたことで教職員間の距離も縮まり、相互理解が促進された。今後は、全国学力調査の経年分析に基づく学習指導の改善や、生徒の主体性を育む小中合同の挨拶運動の強化に努めたい。小中学校の教員が協力して基礎学力の定着と生活習慣のさらなる向上を組織的に図っていく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		生徒の主体性を尊重し、対話や探究を重視する教育方針を高く評価する。定期テスト廃止に伴う単元ごとの評価については、子どもや保護者が自身の成長や成績の根拠を正しく把握し、納得感をもって学習に向かえるよう、より丁寧な周知と評価方法の工夫を求める。授業改善においては、「わかった・できた」という実感を積み上げ、確かな学力向上と学習意欲の喚起につなげてほしい。教職員の皆様には、常に子どもの傍りに寄り添い、全教職員が一体となって一人一人を温かく見守る、組織的な支援体制のさらなる充実に期待する。				

学校独自に設定する分野	自治的活動の充実	A	学年活動、生徒会活動や行事を通じ、「自分たちが学級・学年・学校をつくる」という当事者意識が高まった。今後は「声を上げて安心な環境」と「失敗を恐れぬ挑戦」への支援を高めていく。上手くいかない時は教員が丁寧にケアして次に繋げる。このような挑戦の経験を通して、失敗を糧に成長できる自治能力を育む体制を構築する。	A	A	
	家庭や地域、小学校との「つながり」と「発信」を意識した信頼される学校づくり	B	保護者や地域の問い合わせに対し、丁寧な説明とスピード感のある対応を行った。その一方で、学校評価アンケート(保護者)では、「学校と保護者が協力して教育を進める雰囲気」に課題が見られた。改善策として、学校ホームページの随時更新など情報発信の頻度を高め、日々の活動をより可視化する。具体的には学校の教育方針や生徒の挑戦をタイムリーに発信する仕組みを構築する。また、CSの導入に向けた準備を新年度から本格化させる。	A	A	
	チーム担任制を含めた新体制の構築	B	今年度、主体的な生徒の育成を目指し、新体制に向けた教員研修会や意見交流を重ねるとともに、試行期間として実践・検証を行った。生徒・保護者アンケートでは期待の一方で不安の声も寄せられた。4月に向けて、「全教員で全生徒を育てる」意識を共有し、多角的な視点での支援体制を明確にする。具体的には、相談窓口の設置や情報共有システムの徹底を図り、生徒や保護者が「安心して相談できる」環境を整え、信頼される新体制の構築に努める。	A	A	
学校関係者評価委員会による意見		地域行事や登校見守りを通じ、学校と地域が共に歩んだ1年だった。今後はコミュニティ・スクールの導入を見据え、学校と地域がさらに知恵を出し合い、子どもたちの挨拶の習慣化など、共に育てる活動を具体化させる。新体制のチーム担任制については、まずは実践し、進めながら改善を重ねていく姿勢を支持する。体制の形にかかわらず、教職員全員が常に子どもの傍にいて、全校生徒を温かく見守り続けてほしい。失敗を恐れず挑む大切さを家庭や地域も同じ心で受け止められるよう、学校からの積極的な発信と連携の強化を期待する。				

※自己評価(学校による振り返り)・・・学校が目標に対して、どの程度達成できたかを自ら振り返り「達成状況」をまとめます。

※学校関係者評価(外部の視点による検証)・・・保護者の代表や地域の方々に、学校の自己評価をさらにチェックをします。

※自己評価(学校による振り返り)・・・学校の振り返りが、自分たちに甘すぎず客観的な内容になっているか。

※改善策の適切さ・・・出された課題に対して、次年度の計画が具体的に期待できるものになっているか。